



第3部



ベル・コレクション報告書・解題



ベル・コレクション（一部）

第1章

アメリカから贈られてきた20世紀前半の子どもの本

—ベル・コレクション調査報告—

三宅興子

1. はじめに

2015年の秋、初めて「ベル・コレクション」の調査をしたとき、1949年製のタイムカプセルを開いているような感じを強く受けた。そこにあったのは、アメリカ合衆国の家庭で眠っていた本、身近で読まれていた本、教師のお話の種本、読書指導の参考書、児童百科事典など、実に多様な本であった。一番古いのは、ナサニエル・ホーソン作『七破風の屋敷』（初版1851）の1865年版で、英語以外のものは、ドイツ語の『もじゃもじゃペーター』（出版年不明）などを例外として殆ど含まれていなかった。

アメリカ国内と広島を視察したことのあるアメリカ人が心を合わせて、原爆投下によって焦土となった広島に「子どもに本を贈ろう」と考えた根底には、本を通して、子どもの明るい未来、平和への希求、文化の継承などへのさまざまな思いが込められていたようである。誰かが組織的に「よい本」を選んだのではない、贈った人のさまざまな思いを形にした「多様な本」であるのが、このコレクションの最も大きな魅力である。

（以下の報告は、最初の寄贈本1,513冊のなかの現存本をもとにしている。但し、例外的に、それ以後に寄贈されたもので出版年が1949年以前のもものが含まれている。）

2. 20世紀前半の子どもの本の状況

「ベル・コレクション」は、19世紀後半に出版されたものも含まれているものの、広義に解釈して「20世紀前半の多様な子どもの本」のコレクションと言えるだろう。南北戦争（1861-65）後、アメリカでは「合衆国」としての誇りが持てる国になるためにアメリカ的なものの追及が始まっており、20世紀前半は、その成果が目に見えてくる時代であった。

第一次世界大戦（1914-19）、世界恐慌（1930年前後）、第二次世界大戦（1939-45）という大きい歴史の影響を受けながら、アメリカの子どもの本が成立していく背景として、印刷、特にカラー印刷の発達、雑誌・新聞などジャーナリズムの隆盛、識字を中心とした学校教育や読書指導のカリキュラム化、子ども図書館運動や賞の制定、アメリカ・グラフィックアート協会の活動、ヨーロッパからの文化難民の作家や画家の活躍など、多くの要因があげられる。

こうした状況のなかで、まず、当時、無数といってよいほど出版された安易に作られた海賊版や扇情的な物語で人気の「10セント本」などへの対策を立てる必要があった。経済的文化的に豊かでない階層の子どもを念頭において、1887年、初めて公共図書館に子ども室ができ、以後、そのネットワークは全土に広まっていく。子どもの本屋や*Horn Book Magazine*という書評雑誌も創刊されていった。また、教育学と心理学の分野で大学を卒業した多くの女性が活躍しはじめ、子どもの発達段階や興味分野などの研究が進み、幼児向

きの新しい絵物語が生まれている。加えて、海外からやってきた作家やアーティストがアメリカ文化に触れて制作した作品群には、お手本としてきたイギリスの子どもの本にはなかった新鮮でエネルギーが感じられる作品があり、子どもの本として高く評価された。1922年にニューベリー賞、1938年に絵本を対象としたコルデコット賞が制定されると、保守的であった出版社にも児童書部門が順次できていって新しい感覚の子どもの本が刊行されていく。その背景には、優れた編集者の存在があった。

大きくまとめれば、この半世紀のなかで最も大きい影響を与えたのはメディアの変化で、経済の発展によるマス・コミの成立であった。新聞・雑誌から生まれたコミックの隆盛、ラジオ番組からの作品化、映画、特に、ディズニー映画の既存作品のアニメ化と、逆にそれらの絵本化、作品化などである。そうしたマス・コミへの批判や対策が家庭や学校や図書館などで論議されて、それに対抗できる児童文化財、特に、本に対する関心が高まっていった。

こうした背景を念頭において、以下で「ベル・コレクション」の本を通して、具体的に「20世紀前半のアメリカの子どもの本」を見ていくことにする。

3. ベル・コレクションの特徴

「ベル・コレクション」を年代で見えていくと、1920年までの作品は、出版事項を正確に入れる義務がまだ整っていない時代であるので厳密な数字ではないが約20作品ある。どれも稀覯書であるが、R. H.バーバーのスポーツ物語147（文中のゴシック体番号はベル・コレクションのコレクション番号）やソントン・バージェスの動物物語169の先駆的な作品が含まれており、アメリカ児童文学の特徴があらわれ始めているのがわかる。絵本といえる作品は一冊も含まれていない。

20年代でも絵物語が2、3作ある程度である。作品としては、カール・サンドバーグの本格的な伝記『エブラハム・リンカーン』の児童版33があり、幼年向きの人気シリーズとなったデビット・コーリーの「リトル・ジャック・ラビット」180が入っている。

30年代は、世界恐慌の影響を受けて、出版界は不況、世界名作などの古典的な作品の再版などリスクの少ない作品が刊行されたというのが定説である。しかし、「ベル・コレクション」にはそうした作品は殆ど見られない。むしろ、写真を使った物語や絵本、限られた色数で刷られたリトグラフ絵本、特に乗り物絵本などに新しい時代が始まることを告げるような作品が目立っている。

40年代は、不況を脱した後のベビーブームの時代である。「ベル・コレクション」の殆どがこの時代のもので、アメリカの子どもの本として、のちに国外で翻訳出版された作品が多く含まれている。ただ、戦時下であったことを語る本が一作だけあった。扉の裏の下部にアメリカ合衆国の国章であるワシが“Books Are Weapons In The War of Ideas”と書いた布をくわえたマークの入った“A Wartime Book”（116 *Invitation to Reading* 2, 1944）である。それは、読書に興味を持たない中学生のための国語読本である。アメリカにも、紙不足で統制があったのを知ったが、この作品以外に、戦争ものや戦争の影響が直接的に見られるものはなかった。

また、教師の書棚から寄贈されたであろう多くの識字や読書指導に使用された教科書類とその解説書が含まれている。解題では取り上げていないものであるが、40年代のアメリカの国語教育に関心のある向きには、非常に興味深い資料だといえる。最も古い「副読本」は、1911年ロス・アンジェルスのThe Bolton Printing社刊Myra King, 226 *Tales Out of School*である。カリフォルニア州刊行の26 *New Amsterdam Colonial Days*, 1942と27 *New England Colonial Days*, 1941は、歴史の教科書である。

もう一つ、力不足で取り上げられなかった作品群がある。Friendship Pressの刊行物である。寄贈者は教

会か伝道の仕事に携わっていた関係者と推測される。発展途上国の子どもを主人公にした写真や絵が入った物語である。アメリカからの伝道先やそこでどのような仕事をし、キリスト教徒として何を伝えようとしたのかがよく分かる。

ベストセラー小説（170 *The Bondman*, 1890、279 *The Calling of Dan Matthews*, 1909、148 *The Rosary*, 1910など）や映画の原作本など大人の作品も含まれており、これらも多様な「ベル・コレクション」の特徴の一つと言えるだろう。

そして、「ベル・コレクション」の最大の特徴は、寄贈書の半分近くを占める絵本群にある。1942年創刊時には、カラー入り本としては安価な25セントで大量出版された“A Little Golden Book”は、20世紀内に20億万冊を売り上げた普及数では世界最大のシリーズに育っていく。その初期作品が119冊（44タイトル）ある。他にも、50セント絵本や安価なものが多く含まれていて、図書館では購入されなかった子どもの愛読書が多数含まれているのは貴重である。一方、絵物語が絵本らしくなっていく30年代の絵本史に残っている作品の初版本も含まれており、愛読されればされるほど、多くは消耗が激しくなり廃棄されてしまったであろう30年から40年に出版された多様な価値をもつ絵本群である。

最後に、「ベル・コレクション」の調査をしていて、「岩波少年文庫」と「岩波子どもの本」の初期作品の原著がいくつか含まれていることに気が付いた。岩波のこの二つのシリーズは、1950年代から子どもに読まれただけでなく、日本の作家や画家にも大きい影響を与えていくが、特に新鮮だったのは、丁度、アメリカの子どもの本が黄金期に入る1930年代から40年代の作品の翻訳が多かったことであった。岩波のものは、*The Horn Book Magazine* が主な情報源だったため、その多くを「権威あるアメリカ子ども図書館が認めた本」から、選書され、翻訳されていたのだ。「ベル・コレクション」の調査を通して、これらのシリーズが多様なアメリカの子どもの本の一部を切り取っていたことがはっきりと見えたのも、想定外の収穫となった。

4. ベル・コレクションの作品の概要

1) アメリカに関する本と他国を理解する本 [解題番号 I-01]

「ベル・コレクション」の調査をしている過程で、ジャンルを問わず、「アメリカ」について伝えたい、教えたいという目的がはっきりとわかる作品が数多いことに気が付いた。それは、移民・難民を数多く受け入れ、その子どもたちが「よきアメリカ市民」になるための必読書にもなった。

一例をあげてみる。553 *We Love America: Simple Stories of American Living*, 1948（初版1941）という幼児向けアメリカの暮らし入門書である。小型絵本で、左ページは文章、右ページは絵で構成されていて、田舎の農場・大都会、大河のそばの暮らし・カウボーイのいる牧場、果樹園・自動車での旅、おもちゃ屋・食料品店と次々に紹介されていく。学校・図書館の場面で、新しくアメリカにやってきたサミーがいとこのピーターに学校へ行こうと誘われると、サミーは“I haven't any money.”と断る。ピーターはアメリカの学校は無料でどんな子どもでも歓迎されると伝える。図書館でも同じような問答が入っており、アメリカでは差別なく無料で学校と図書館で受け入れられることを伝えている。このタイトルの“I Love America”は、“Great America”とともに、いろいろな場面で使われているフレーズである。

初代大統領ジョージ・ワシントンの伝記は、繰り返し出版されている。その内容も、簡潔な伝記、子ども時代に特化したもの、夫人の伝記まで幅広く、アブラハム・リンカーンとともに、どこかで必ず出会う伝記であっただろう。

アメリカ建国の歴史と、そのなかで活躍した「英雄」の物語もまた、繰り返し出版されている。植民地から国家となった誇りは、星条旗の成立の歴史や“Our Nation”（わたしたちの国）という言葉からよく伝わ

てくる。

アメリカ以外の国や地域を扱った作品も数多い。特に、発展途上国の子どもを主人公にして、その暮らしや文化を伝えようとするノン・フィクションものと、文学作品として制作されたが、結果として「他国の理解」に繋がる本になったものがある。このジャンルは、アメリカが多民族国家であることと関係が深い。現在では、世界を地球規模でグローバルにとらえる能力を養う必要性が増してきており、注目されるジャンルになっている。

初期の試行錯誤の歴史から読み取れたのは、断片的な知識を集めたものは論外としても、実際にその国に行った経験があり、情報を集めて書いたとしてもその国がうまく伝わるとは限らないことである。1865年の出版で、長くオランダのことを知るならこの本といわれてきた『ハンス・プリンカー』は、著者ドッジがオランダを訪れる体験がなく創作されている。逆に、伝道などの使命を持って他国を描くと著者の価値観では理解できない文化や風習がないがしろにされて描かれてしまうのである。

2) 古典的な作品 [解題番号 I-02、特集5]

長くイギリス児童文学を受け入れてきたアメリカでは、幼児向けの絵本で「ちびくろサンボ」や「ピーター・ラビット」が、創作ではなく、昔話のキャラクターであるように自由に再話されていたり、ウィーダ作「ニューロンベルグのストーブ」のように本国では読まれなくなった物語がひっそりと残っていたりしている。また、カウボーイの国で『黒馬物語』の人気は高く、さまざまなさし絵画家による異なった魅力を持つ馬の姿が目についた。

また、「ベル・コレクション」では、イギリス版そのまま出版された作品は数少ない。テニエルのさし絵が入った『ふしぎの国のアリス』の限定版とA. A. ミルンの三作品は注目される。特に、ミルンの詩集『ぼくたちの幼かったころ』273刷、『クマのプーさん』100刷、『プー横丁にたった家』137刷は、原著のまま、版を重ねており、その版ごとの年の記録が扉裏に掲載されており、人気が出る過程が一目瞭然であった。

イギリス以外の国の作品としては、『ピノッキオ』の人気が目立っている。原作では、教訓的な箇所や木で作られた人形であることの意味なども重要な意味をもっていたが、アメリカにやってきたピノッキオは、トム・ソーヤーなどと同じ悪童物語の系列に連なっているように見える。

アメリカ児童文学の古典とえば、『トム・ソーヤーの冒険』と『若草物語』である。トムは、アメリカの少年の代名詞であり、『若草物語』のジョーは、アメリカの少女像を作り上げてきた。特に後者は「家庭物語」であり、時代が変われば読まれなくなる実態のなかで、母親と四人姉妹のキャラクターの魅力で時代を超えて読まれている稀有な作品である。

現実の物語が主流となるなかで、『オズの魔法使い』は、イギリス流のファンタジーではなく、アメリカの田舎を背景にして創作された最初期のファンタジー作品である。舞台、ドラマや映画となって広く読まれるようになった。

アメリカとえば、アメリカン・ドリームの「貧しく生まれて大統領になる」を、作品として書き続けた作家ホレイショー・アルジャーも欠かせない。「ベル・コレクション」には、一冊しか所蔵されていないが、19世紀のアメリカでもっとも読まれた作家で、約400作品を残していると言われている。

『名犬ラッド』1919は、名馬や名犬の物語の先駆けとなった作品で、擬人化された動物物語とは違った魅力を持つ「現実生活に基づいた作品」として、大きい影響を与えている。

3) 児童文学作品 [解題番号 I-03、04、05]

アメリカでは、20世紀初頭から子どもと本を結びつけようとする試みがいろいろなされている。その一つ

に、表紙に大人が子どもに本を読んでいる絵が入っている本で、詩や短編の名作が集められている作品集がある。父親や母親が子どもに本を読んでやっている構図の絵は、イギリスのヴィクトリア時代の中産階層の家庭におけるよき習慣として、多くの絵画や作品を飾ってきた。それがアメリカに文化輸入されると、中産階層だけではなく、もっと広がりを見せ、安価な絵本などにも使われるようになっていく。中でも、夜寝る前に読んであげる本の選集は、1910年代から多数出版されている。その定番となったのが、『365日・お休み前のお話集』である。また、教育学者と作家が協力して開発した学年別の読み物シリーズにも、ロングセラーが出てきている。

そうした中から、「幼年文学」と後に言われるような作品が誕生してきて、今日まで活躍する人気キャラクターが続々と登場してくる。

その先駆となったのは、ソーントン・バージェスの動物を主人公とする短編童話であった。生態を活かした動物の擬人化に成功しており、一話ずつが一冊の作品にもなって愛読されていった。20年代になると、同じキャラクターを主人公に据えて、次々と、主題を変えて新しい作品を生み出していくシリーズが出てきたのである。数多いなかで、ウサギの“Little Jack Rabbit”や布の人形“Raggedy Ann”が活躍するシリーズは、多くの読者を獲得した。アンの人形は今日でも購入でき、著名なキャラクターに育っている。20年間に80冊近い作品のあるリューマチが痛む老ウサギ“Uncle Wiggily”シリーズは、それだけでも、この人気キャラクター成立に関する論文が書けるほどの変遷を辿っている。

ニューベリー賞を受賞している作家ベイリーとセレディの二作品を取り上げているが、残念ながら、両者とも60年後の今日のアメリカで愛読されているとは言い難い作家になっている。

幼年文学とは逆に、高学年向き、ヤング・アダルト向きの読み物にも、新しい作品がでてきている。そのひとつは、スポーツ物語である。バーバーは、フットボール試合を描いた作品を1904年に出版しており、その後、「スポーツもの」は、少年向き読み物の人気テーマとなっていく。少女向きとしては、多くのいわゆる「少女小説」が出てくる時代でもあったが、新しいタイプの作品として、142 *Peggy Wayne—Sky Girl; A Career Story For Older Girls*, 1941という飛行機の乗務員として働く女性が主人公の物語が含まれていた。後に「職業物語」として形をなしていくが、まだ、時代はそこまで行っていない。

幼年文学では、性別の影響を受けない動物が主人公であったが、学年が上がると、少年ものと少女ものに分かれてくる。少年ものの人気シリーズ“Jerry Todd”でその一端がわかる。また、1930年代の特徴のひとつとして、「少年探偵」や「少女探偵」の活躍するシリーズが、まるで工場で生産される製品のように次々と出版されたことがあげられる。「ベル・コレクション」には、少女探偵として人気を分け合ったナンシー・ドリュウとケイ・トレイシーが活躍する物語が含まれている。

また、「ベル・コレクション」には、映画の影響を受けて読まれたのではないかと推察される原作本も含まれている。それぞれに異なった成立理由を持つ三作を取り上げているが、映画の西部劇が衰退し、すっかり忘れられていた「ローン・レンジャー」は、2013年に、新しい脚本で映画化され、映画からのノベライズ本が出版されている。

4) 伝承文学と知識の本 [解題番号 I-06、07]

「ベル・コレクション」には、神話・伝説や昔話の本格的な作品はあまり入っていない。アメリカの民話として著名な「アンクル・リーマス」の古い版が一冊あるが、1940年代に、ディズニー絵本になったり、おもしろいお話集に採られたりしていく。ロシア民話が二冊あり、イギリスで長く愛読されていて伝承のお話の宝庫である「十二色の童話集」の内、3冊が入っている。

知識の本も数が少ない。サイエンス教育が意識される時代ではあったが、具体的に作品とは結びつかなかっ

たのかもしれない。科学読み物『現代のアラジンとその魔法』は、身近なものから科学の目を養う意図をもっていたし、『健康になる物語』もわかりやすく物語にして理解を得ようとしているが、あまりうまくいっていない。そのようななかでは、写真を使って汽船のすべてを紹介している『汽船の本』の手法は、当時の子どもの興味をひいたと思われる。

イリーンによる『いま、何時ですか』は、英語以外の言語からの翻訳作品が殆どない時代に、わざわざロシア語から翻訳されており、科学読み物として、高い評価が与えられていたのがわかる。『ハサミと糊の工作』は、当時の子ども雑誌などで必ず掲載されていたような手近な素材を使った手作り本である。さし絵が美しく、古くなっていない珍しい一冊である。

5) 詩の本：“Mother Goose” と *A Child's Garden of Verses* [特集2]

リズムを楽しみながら、身体で言葉を覚えることのできる“Mother Goose”は、幼児のいる家庭でよく見かける。大部な豪華版から、子どものお小遣いでも買える安価なものまで多数出版されており、年代順に並べるとさし絵の変遷もわかってくる。ユーモアのある絵からモダン・アートのような絵まで、多種多様である。取り上げている唄もそれぞれに違っている。幼児教育の現場では、マザー・グースだけで、挨拶から勉強まですべて間に合うと言われており、英語世界への入門の機能も持っている。

また、イギリスのステイーブンソンによる『子どもの詩の園』は、英語圏の子どもが最初に覚える英詩の入門書のような役割を果たしている。短い詩がひとつの世界を作っており、さまざまな感覚が刺激される詩集として、マザー・グースとともに、さし絵画家が、一度は挑戦したい作品なのである。

アメリカの詩人の作としては、ユージン・フィールドのものがあげられる。子ども向きに編纂された詩集には必ず一編は収録されている詩人であるが、多数ある作品のなかから人気のある作品を選んだ選集が所蔵されている。

5. ベル・コレクションの絵本の概要

1) クリスマス絵本とネコ絵本 [解題番号II-01、02]

クリスマス絵本から絵本の部に入るのは、たまたま、「ベル・コレクション」所蔵のものが、絵本の歴史の前段階のもの、明るく楽しい物語絵本、繊細な色調で描かれた素朴なクリスマス風景に癒される現代絵本であったことによっている。絵本がその時代の子ども観や思潮も含んで表出されているのを的確に示している。

次に、ネコ絵本がくるのは、「ベル・コレクション」の絵本で最も数が多く、その上、絵本の世界に読者を誘い込む「絵本の文法」のようなものの成立過程が見えてきたからである。まず、ネコの画家として人気のあったニューベリーの『ネコのバベット』は、オーソドックスな物語絵本である。『コピー・キャット』になると、ネコの生態を描くより、デザイン化されたキャラクターになって、現代の「キティちゃん」に繋がっていくようないわゆる「かわいい」絵本である。人気を得るツボは、読者の方を真っ直ぐに見つめる視線にあり、40年代には、その技を踏襲して、ウサギ、ヒヨコ、リスなど毛並みを触ってみたい動物を主人公にした動物絵本へと進化していく。『教会ネコのガブリエル』は物語絵本として優れ、絵の構図のおもしろさや細部の発見がある。

なぜ、ネコ絵本がこれほどの人気なのか、十分に解明できていないが、動物で描くことで、国、人種、文化などの問題を回避し、自由になれることは確かであろう。

2) ユーモア絵本と動物絵本 [解題番号Ⅱ-03、04]

ユーモアのある絵本は、いつも子ども読者に歓迎されている。しかし、『ふしぎな500のぼうし』を刊行した1930年代には、ドクター・スースのそれまで見たことのない動きのある線画や独特の動物や人物画、奇妙な物語は、大人の読者には全く理解されず、子どもが楽しくページを繰って絵本の世界に入って行くのを傍観していたのである。その実績から50年代になって、言葉遊び絵本などが「はじめてよむ本」などの選書リストに入るようになり、1991年に亡くなったときは、アメリカを代表する絵本作家として認知されていた。

マンロー・リーフは、道徳教育の徳目のような言葉を使って、おもしろい絵本を作る名手で、大人読者の認知もそれほど困難ではなく、物語絵本として独自の世界を拓いたと言える。

イーネズ・ホーガンは、黒人の子どもニコデマスやエパミナンダスを主人公にした絵物語で人気があった作家である。黒人を笑いの対象として描くことは、主な読者が白人の子どもであった30年代までは、ごくありふれたことであった。しかし、“Politically Correct”(差別的でない)かどうか問われ、本棚から消えて行った。ただ、ホーガンの描いた子ゾウの魅力は取り上げる価値を残していると考えた。

動物絵本は、知識絵本の範疇でも出版されているが、渡り鳥の旅を描いた『コマドリの大旅行』や人気者のアザラシが引退して動物園で余生を送る『サーカスのアザラシ フラッピー』は、物語絵本としても楽しく読める。ガス・ウィリアムズの『ひよこの本』は、子どもが思わずふわふわの毛並みを撫でたくなるような絵本である。

『ゾウの子ども』『赤いリスさん』『降れば土砂ぶり』の3作は、いずれも「移民アーティスト」がさし絵を描いている。30年代から4、50年代のアメリカ絵本で、卓越した描写力や斬新なデザインや民族伝統画などの美しい絵本の絵本画家名を見ると、ヨーロッパの国々で美術教育を受けた画家の手になっていることが多い。ロジャンコフスキー、ウィーゼ、グスターフ・テングレン、ティボル・ゲルゲイ、ワイスガード、ドーレア夫妻、ピーターシャム夫妻などである。言語による障害で不利になることの少ない絵本の世界で、彼らの才能が開花していったのだ。

3) リトグラフ絵本 [解題番号Ⅱ-05]

大量に刷れるオフセット印刷が主流になる前の30年代から50年代あたりまで、色彩絵本の多くはリトグラフ印刷されていた。石版画では大量に刷れなかったが改良され、アルミ版などで多く刷れるようになったのである。リトグラフ絵本が目立つのは、版画なので何度も刷れば、美しい色彩絵本ができるからである。画家が直接現場に行って印刷に関わることもあった。「ベル・コレクション」のリトグラフ絵本と、後年再版された同じ絵本を比較してみるとその違いに驚かされる。

『バーミューダ島』『アーミシュの少女リディア』『大きくなあれ』の3作は、1940年代を代表するリトグラフ絵本である。次いで、マーガレット・ワイズ・ブラウンとレナード・ワイスガードのコンビによる3作を取り上げている。多くの画家と組んだ絵本を残しているブラウンが、その新たな物語を3作、ワイスガードに託し、画家は、見事に一作毎を描き分け美しい絵本に仕上げた。この6作は、アート作品ではないが、アメリカの絵本を語るとき、手作りのアートのような美しい絵本として高い評価が与えられるだろう。

4) 物語絵本 [解題番号Ⅱ-06]

絵本は、さし絵入り本 → 絵物語 → 物語絵本(文と絵が互角) → 文字なし絵本や物語に依存しない絵本へと時代を追うにつれて新しい作品を刊行してきた。しかし、この時代では、まだ、物語が先行して、画家がそれに絵を添える絵本が多い。文と絵をひとりでこなす絵本も出てきてはいるが、絵が先行して、物語を添える作品は例外的である。

ガアグは『白雪姫と七人の小人』で昔話の絵本化を試み、『はなのすきなうし』で、画家ローソンは与えられた作品を絵でも語っている絵本にし、サーバーの童話『たくさんのお月さま』では、スロボドキンの絵が入ることで、ひとつの世界ができて、さし絵ではあるが、絵本とも呼べる作品になっている。

聖書の詩句からなる宗教的な雰囲気をもつ『こさめ』や、1725年の物語がアメリカで昔話のようになった絵本『くつふたつちゃんのお話』、そして、アフリカ系アメリカ人の絵本など、絵本になってきた長い歴史と絵本の多様性を語ることでできる絵本が取り上げられている。

5) 乗り物絵本 [解題番号Ⅱ-07]

機関車や自動車が幼児絵本の人気者になったのは、眼鼻のある名前を持った「人格」を備えるようになってからである。その先駆的な作品が「小さな機関車」が活躍する物語であった。ここでは“Little Engine”として固有名詞のように名づけられている。その後、機関車絵本が盛んに刊行されるようになり、他の乗り物絵本の隆盛に繋がっていった。「スモールさん」のシリーズになると、乗り物の種類も多くなり、動かし方など知識絵本の要素も入ってくる。また、グラマトキーのように、乗り物がヒーローになる物語絵本まで出来ている。

6) 知識絵本 [解題番号Ⅱ-08]

「ベル・コレクション」には、百科事典はあるが、「知識」をテーマにした図鑑は、殆ど見当たらなかった。他に類書のない『はがねの本』は、ロシア絵本の影響が考えられるが、工業時代の工場で働く人や機械などが描かれている。『小さい赤い灯台と大きい灰色の橋』は、実話に基づいたノン・フィクション絵本である。『働くトラック』では、トラックの種類やその機能、運転手の仕事ぶりなど、流通の先端で働くトラックそのものを主題にしており、20世紀後半に、より多くの情報と精緻な絵によって飛躍的に発展していくジャンルの先駆けである。

7) 写真絵本 [解題番号Ⅱ-09]

20世紀前半のこの時代には、写真を使ったいろいろな絵本が出版されている。結論を先に言えば、時代を超えることでできた絵本を見つけることはできなかった。人形絵本やお出かけ絵本、飼いネコを主人公にしてつくった物語絵本、身近な材料を使ってクイズ形式で言葉を覚えていく知育絵本などに、工夫の跡を見ることはできたが。

20世紀後半になると、カメラの発達によって、肉眼では見えない世界が写せるようになり、新しい写真絵本が刊行されるようになっていく。また、ドキュメンタリー絵本や図鑑なども充実してくる。

8) しかけ絵本 [解題番号Ⅱ-10]

「ベル・コレクション」には、しかけ絵本が6冊あるが、どれも見事にしかけが壊れているのは、子どもたちに愛された証拠である。壊れたままで廃棄されず、今日まで残っているのは稀有で、しかけ絵本の歴史の一コマとして貴重である。それは、しかけ絵本は、読んでもらうという受動的な絵本を、自ら乗り出して動かすことのできる能動的な絵本にできるので、人気があるが、人気のあるものほど、壊れてしまい、その実態がつかめなくなっているからである。

しかけは、単純なポップアップ本、本に細工をしてページをめくる楽しみのある絵本、そして、タブを引っ張って動かす絵本である。『長ぐつをはいたネコ』を制作したジュリアン・ヴェールは、ドイツやイギリスの高度なしかけ絵本が高価すぎて手軽に遊べなかったので、安価であるが複雑な動きをするタブを考案して

いる。30作ほどを残しており、「アメリカしかけ絵本の父」と呼びその作品を高く評価しているコレクターもいる。

9) ディズニー絵本 [解題番号Ⅱ-11]

「ベル・コレクション」には、ディズニー絵本が8冊ある。325 *Peculiar Penguins*, 1934以外はすべて40年代の絵本で、原作があって、アニメ化し、アニメからまた絵本をつくっている。この時代のディズニー社がアニメに向く作品をいろいろ探し、短編や長編作品を動画にしていくスピードにはすさまじいものがある。また、自社のアニメに向く画家を獲得していく確かな目配りも見べきものがあったと言える。絵本作家の多くは、ディズニー社で働いた経験があるか、何らかの関係があった画家なのである。

10) “A Little Golden Book” [特集1]

1942年に販売を開始して以来、薄利多売の戦略が成功し、巨大なシリーズ“Golden Books”を形成していき出版史に残る快挙となった。その最初のシリーズが12冊の“A Little Golden Book”である。「ベル・コレクション」には、1949年までの44タイトルが所蔵されている。

このシリーズはどうしても安価であることが取り上げられてしまうが、最初の12冊のリストをチェックすると、それまでにあった絵本をよく研究し、子どもの興味性を視野に入れ、教育学博士を監修者に据え、カラー14ページと白黒28ページを交互に使い、力量のある画家を起用した上で、市場調査をし、ベイビー・ブーマーのいる家庭をターゲットに周到に考えられた企画であったことがわかる。安価本ではあるが、従来の安ピカ絵本とは違っていたのである。

現在も版を重ねているタイトルも多くあり、「解題」で取り上げた他にも、昔話では、310 *The Little Red Hen*, 1942 と 604 *Hansel and Gretel*, 1943が、乗り物絵本では、648 *Scuffy the Tugboat*, 1946と 666 *Tootle*, 1945など、ロングセラー作品が目につく。

11) 「ちびくろサンボ」と「ピーター・ラビット」 [特集3、4]

「ベル・コレクション」に集まってきた「ちびくろサンボ」と「ピーター・ラビット」の絵本には、イギリスの原著そのままのアメリカ版が一冊もないのが不思議だった。すべて「海賊版」なのである。しかし、読んでいくとおもしろいことに気付いた。どれも、まるで、作者のない昔話のような扱われたかたをしていからである。396『くつふたつちゃんのお話』のケースと同じなのである。骨格のしっかりした昔話が細部を落としたり変えたりしながら伝わっていくのと同じような伝播力がある話なのである。

「ちびくろサンボ」の場合は、原著が小型で、描かれている黒人がアフリカ系でなかったこともあって、そのままでは、受け入れ難かったのだらうという推測はできる。この絵本は、イギリスで、シリーズの一冊として刊行されると他の本とは比較にならない売れ行きを示し、シリーズの他の画家が模倣作を出しており、なぜ、幼児にこれほど受容されるのか、かなりの間、理解できなかった絵本である。

また、黒人差別の問題で、日本でも公共図書館から姿を消し、「岩波の子どもの本」版や他の出版社でも絶版にするなど、論議のある絵本である。

「ピーター・ラビット」の場合は、原著の絵が、安ピカ絵本を見慣れていた子どもには、「地味」過ぎて可愛くないと思われたのではないかと推測できる形跡はある。著作権の確立した今日では考えられないが、著作権を支払わないで、「ピーター・ラビット」をアメリカの子どもに紹介した絵本があることも、「ベル・コレクション」の多様性のひとつではある。

6. おわりに

「ベル・コレクション」の魅力は、その多様性にあると最初に述べているが、その魅力をどのように分析し、わかりやすく、順を追って述べていくのかは難題であった。ひとつ、ひとつの作品を関連付けながら、「解題」から書き進めていったが、その過程で、関連付けの困難な「なぜ、ここにあるのか」という疑問にぶつかる作品も出てきている。

ただ、結果として、20世紀前半のアメリカの子どもの本の実態を、ある程度、解明できたのではないかと考えている。調査にかかる前には、考えてもみなかった結果である。ただ雑多な集まりにしか見えなかったものが、そうではなく、既存のアメリカの子どもの本の歴史には全く扱われていない作品群を通して、家庭と学校と図書館とでは、子どもの本に対する考え方に温度差のあることが、鮮明に浮かび上がってきたのだった。

資料面では、「大衆的」とみなされた作品は手がかりが少なく、やっとサイトで名前を見つけて検索すると、「この作者のことを調べているが不明なので、手がかりを持っている方は連絡をください」と、書いてあって苦笑したこともある。また、筆者の力不足でマンガ家やマンガがもとになっている作品、Percy Crosbyの *181 Skippy*, 1929やEdgar Martin原作 *243 Boots and the Mystery of the Unlucky Vase*, 1943などに触れることができなかつたのは心残りでもある。

この調査報告が、「ベル・コレクション」の稀有な作品群を「発見」し、作品に触れる手がかりになることができればと願っている。

最後に、戦後70年の記念事業として、この貴重な機会を与えていただいた関係者のみなさまに、厚く御礼を申し上げます。

主な参考文献

Something about the Author, vols1-292, Gale, 1971-2016

Daniel Hahn: *The Oxford Companion to Children's Literature* 2nd ed. 2015

Newbery Medal Books: 1922-1955 The Horn Book, Incorporated 1957

Caldecott Medal Books, 1938-1957 The Horn Book, Incorporated 1957

Leonard S. Marcus: *Minders of Make-Believe*. Houghton Mifflin, 2008

Barbara Bader: *American Picturebooks from Noah's Ark to The Beast Within*. Macmillan, 1976